



鉄のふしぎ? 博物館

■59

現在のレートは1ポンドが110円前後ですが、為替が2001-240円で推移していた1985年までは輸出競争力もあり、アメリカや東南アジア諸国へもチェーンを輸出していました。そんな頃のお話です。1979年、私がまだ若武者だったころ、シアトルのストッキスト、日本で言う船具商のような業者を表敬訪問。その広大な資材、商品置き場の一部に(非常に乱雑な置き方で、ま

『バルトのチェーン』



画像①



画像②

るでスクラップヤードのようでした)、チェーンを検査する引張試験機が設置されていました。山積みされたチェーンは形状が種々異なり、製造法や生産国もまちまちだと思いました。一部に我が社の製品が含まれていたのです。

その在庫の山の中に、見たことがないユニークな形のチェーンが含まれていました(画像①)。誰

がどのように作ったのだろう。スタッドがリンクの本体の一部になっていませんか? 強度は強いのだろうか? 鍛造品のようにも見えるが鍛造品だろうか? 興味を覚えました。社長に尋ねると、『ダイ・ロック』という商品名らしいことがわかりました。英語の不自由な私にはそれ以上知ることが出来ませんでした。

このチェーンに長い間疑問を持ち続け、少しずつ判ってきました。ロイドの資料には、その構造がスケッチされ、雄ねじと雌ねじの部品を作り組み合わせて、総型で大きな力を加え最終整形された製品です。それは『ダイ・ロック(Di-Lock)』と呼ばれるチェーンで、アメリカの特徴のある形状のアンカーとチェーンを作る、バルト社(BE

社)製です。1911年アメリカ海軍ではこれを標準品と設定しました。現在すでに生産はされていないようですが、チェーンは今もアメリカの軍艦で使用されています(画像②)。

2015年6月、元鍛冶屋の友人が「おやじが大事にしていた外国の鎖が、

倉庫の隅から出てきた、必要なら置いて行くよ」と言うので帰られました。初めて見てから35年余り、私の欲しかったチェーンがやっと入手出来たのです。少し小さなチェーンで、サイズは1・125インチ(28・5mm)で、全長は約2・3メートル、総リンク数は20、重量は約40kgです。早速、写真撮影しリンクを断面が見えるように、削りだし研磨しました(画像③)。期待通り、雄ねじ部と雌ねじ部のかみあわせ部の綺麗な構造を肉眼で



画像③

【参考資料】
△ロイド資料 CHAIN CABLE AND THEIR TESTING BY W.DENNIS HECK (1966)
△ワシントンチェーンホームページ <http://wachain.com/dliok>

衣川製鎖工業・衣川良介社長

画像はカラーと交換しています。